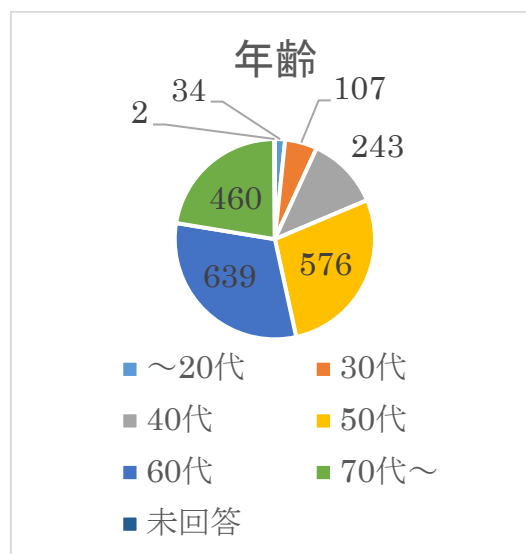
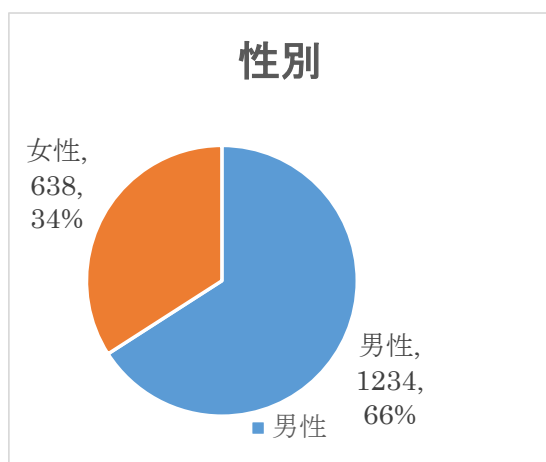


「みまもりーね」第1回アンケート結果

見守りたいのはやはり「遠方に住む高齢の親」

産経新聞社は、産経 iD 会員を対象に「見守りサービス」に関するアンケート調査を実施した。全体の約8割が「見守りサービス」に興味を持ち、その対象としては遠方に離れて住む高齢の親の様子を知るために使いたい、と回答する人が最も多かった。

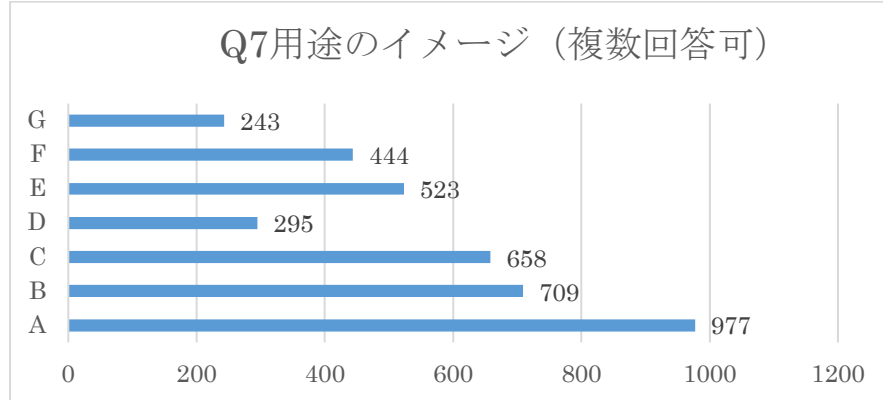
調査は2020年9月5日～20日に行い、産経新聞の読者らを中心とする産経 iD 会員 2061 人から回答を得られた。性別は男性が66%を占め（グラフ1）で、年齢別では50代と60代で約6割に達した（グラフ2）。



気になるのは部屋の温度、照度

「見守りサービス」についての用途のイメージとしては、「遠方に住む高齢親族が、熱中症にならないよう部屋の温度を把握」「カーテンの開け閉め、照明を点けるなど普段どおりの生活か、部屋の照度変化を把握」などの用途が上位を占めた。

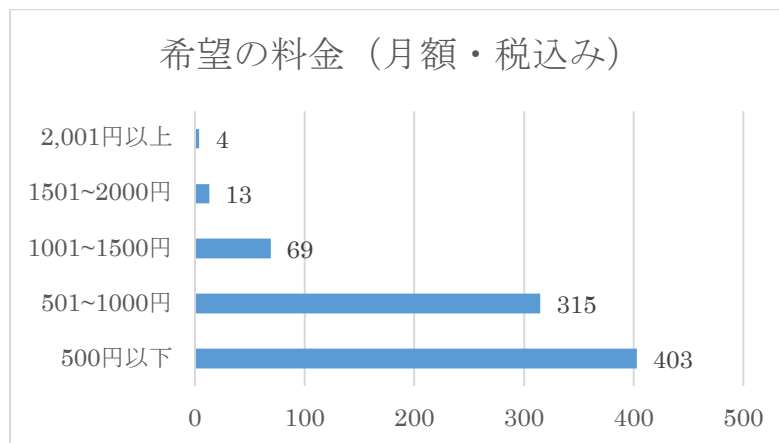
一方で、親以外では留守をしている子供の様子や倉庫や農業用ハウスなどの温度変化を知りたい、といったニーズがあることも分かった（グラフ3）。



- A 熱中症死者の増加が報じられるなか、遠方に住む高齢の親族の部屋の温度をそれとなく把握する
- B 遠方に住む高齢の親族が、カーテンを開け閉めする、照明を点けるなどして部屋の照度変化があるかどうかをそれとなく把握する
- C 同居している高齢の家族が、日中ひとりで過ごす間、部屋の温度や湿度の変化をそれとなく把握する
- D 留守番している子供が、適切にエアコンを使っているか、部屋の温度を把握する
- E 自宅を留守にするとき、ペットが過ごす部屋の温度や湿度を把握する
- F 大切なものを保管している物置や倉庫が、高温多湿になっていないか、数値を把握する

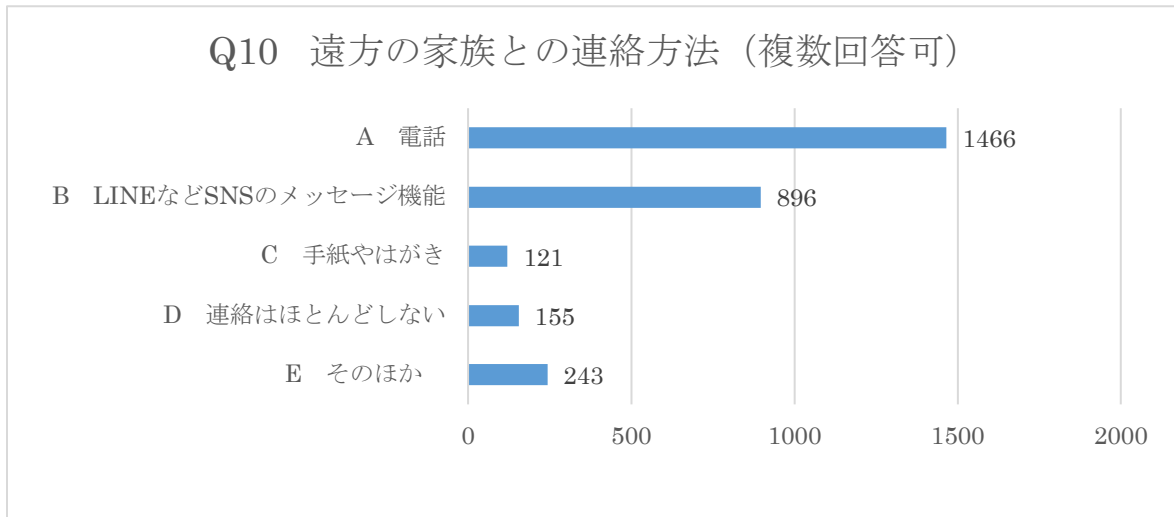
月額料金は500円以下を望む声多数

「見守りサービス」の使用料金については500円以下を望む人が最も多く、501～1000円がこれに続いた（グラフ4）



連絡方法は「電話」

LINEなどのメッセージ機能が普及しているが、遠方の家族との連絡方法は、電話が最も多く、連絡はほとんどしない、と回答した人もいた（グラフ5）



身近にある「孤独死」の言及も

iD会員からの自由記入の意見の中には、その用途に関連して「孤独死」について触れる声も届いた。「市町村単位で一人暮らし老人宅に配布し、孤独死防止のためのモニターとして普及させる」（神奈川、70代男性）、「自分が独居老人になった時、異変（認知症で行動がおかしくなる、脳溢血で倒れる等）が起こった場合に子供に直ぐ気付いてもらい、孤独死を防ぐ」（大阪、50代女性）という意見のほか、「引き籠りで一人暮らしの従弟がアパートで孤独死しました。数日間、新聞が取り込まれていないのを不審に思った隣人が管理人に知らせ、警官と一緒に部屋に入ると、亡くなっていたのです。このセンサーで照明が夜中も点けっ放しと分かれば、命が救えた可能性が大いにあったと思う」（神奈川、60代男性）といった身近な経験から必要性を感じるとの声も見られた。

【本件に関する報道関係者からのお問い合わせ先】

産経新聞東京本社 新プロジェクト本部 担当：山本、谷内

takeshi.yamamoto@sankei.co.jp

電話：03-3243-8511（平日10時～17時）